

◆SDGs（持続可能な開発目標）と人文学

SDGs は 2030 年の世界の姿を実現するまでの「道しるべ」

SDGs の概要は皆さんもご存知だと思います。「2030 年の世界の姿」、あるいは最近では「2030 年の世界の常識」という言い方をしています。各目標の中に書かれていることは、決して難しいことではありません。小学校で習うことばかりが並んでいるようなイメージです。ところがなぜか大人の社会になると、これが実現できていません。何かがおかしいということなのでしょう。そこを修正するための「道しるべ」として、SDGs を捉えると良いでしょう。

SDGs を推進していくうえでひとつの重要な理念として、「誰一人取り残されない」というものがあります。それからもうひとつの重要な理念は、「世界の変革」。17 の目標を実現するには、いまの社会から考えると、変革、つまり大きく変える必要があるという危機感が非常に強く出ています。変革ということを考えて、じつは歴史上、いろいろな変革がこれまで起こっています。私の父は、変革期の文学という文学部の教員を長らくしていました。先日、父が他界したこともあり、父の書いたものをいろいろ読み漁っていたのですが、変革について、文学も正面から取り上げていることがわかりました。そこで、まさに文学部の話なので、こういったところから入っていこうと思います。

文学のなかに「世界を変革する」のヒントがある

日本にも過去に大きな変革の時期がいくつかあったと思います。変革に関して、徒然草は「下より萌しつはるに堪へずして落つるなり」と、下からつぼみが出てきて、押し出されていって、それにこらえきれずに木が落ちていくことが書かれています。これはまさに変革、大きく物事が変わっていくことを見るうえで、非常に重要な示唆を与えていると思います。我々は落ち葉というのは、葉っぱが落ち、その下に芽が出てくるというように思いますし、木によっては確かに、そういった種類もあるのはあるのでしょうか。ところが文学的に見ると、下から突き上げていくもので物事が変わっていく。これは必ずしも現象だけを見ているのではなく、世の中のいろいろな動きをそのままとらえたうえで、それが象徴される出来事として“落ち葉”を見たところから出てきた表現でしょう。こういった我々が生きていくうえでの重要な考え方や示唆が、文学には詰まっていると思います。SDGs から遠いように思われる日本文学でも、こういった表現が見られるわけです。これまでの先人たちの知恵を活かしていくのが、SDGs 的な社会をつくっていくうえで重要になると思いますので、そういっ

たことを改めて提示していくことも、文学が果たせる役割なのではないかと考えています。

また父は中世文学の変革というところを見ていたのですが、たとえば1156年の保元の乱があって、その辺りが武士階級と貴族階級を逆転させる一段転換期となり、その後、武士の時代は700年くらい続くわけです。この辺りの一連の流れで変わったというのが、物語文学の中にもあります。見ていくと、時代背景というのが、どうやら武士と貴族が対立していたわけではなく、朝廷や貴族と結びついて、農民を支配していた平家と源氏が武士の新たな社会をつくっていったと。そういうことを考えると、じつは貴族社会の中にも、武士の社会に続くようなエッセンスがあったということなんかも浮かび上がってくるわけです。こういうことは歴史の中でいろいろな形で繰り返されています。こうした出来事を見ていくことが、じつはSDGsに向けた大きな変革を考えていくうえでも重要なヒントになるのではと思っています。

次にSDGsの目標をクリアするにあたって、いかに人間の気持ちに関わっていくのかについてお話したいと思います。私は、SDGsに“書かれていないこと”が、実現するうえで非常に重要なのではと考えています。書かれていることをいかに実現するかというところに腐心しがちなのですが、人を動かすには、文学や芸術、音楽など、そういったところから生まれる感動というのが重要なのだと思います。これらの観点からSDGsを捉えることも大事だと思いますし、学問をやっていく者としては、やはり人文学と一緒に、本当の意味でのトランスディシナリティというものを実現していくことが重要だと思っています。

SDGsには環境・社会・経済の3つの要素がある

SDGsは大きく、経済、社会、環境の3つの要素が散りばめられ、包括的に含まれていることとなります。いずれも持続的に進めていくことが重要ですが、とくに強調されているのは、環境の側面です。農作物の生産や消費、あるいは森林資源の使用などが1950年ぐらいから急速に加速していて、このことが地球への環境負荷を大きくしており、これが気候変動をはじめとする社会システムの不安定を生み出しています。これをなんとかしなければいけないというのが、SDGsができた背景のひとつでもあります。

そしてもうひとつは社会。人間がつくりだす社会システムが、どうもおかしくなっているようだ。たとえば格差やジェンダー。あるいはパンデミックの問題なんかもその典型だと思います。人間があまりにも自然界に近づきすぎていったと。ただ近づきすぎてウイルスが人間にうつるというだけではなくて、人間の社会でも、人間と人間の距離が近くなっているため、一気に広まってしまうわけです。これがここ10~20年の間でいろいろな現象として起きています。エボラ出血熱やインフルエンザ、SARSなどの問題もそうです。それから人と人とはインターネットを介して新たなつながりも生まれています。社会の変化というものがいいように使えるものもあれば、悪いように使われてしまっているものもあります。こ

のままいくと持続が不可能なものもありますから、変えていく必要があるということです。

次に経済。経済も社会や環境を食い物にしてどんどん進んできましたが、この成長一辺倒といの考え方も変えていく必要があります。SDGsはこの環境、社会、経済の3つの大きな要素を含みながら成り立っていつているものです。

SDGsの目標は全体で考えることが重要

SDGsの特徴は、まずひとつは「変革」が重要になっているということです。もうひとつは「目標とターゲット」。目標しかない体系だということです。これまで国連が作ったもので、このように目標だけというものはありませんでした。その意味では新しいチャレンジが始まっていると言えます。目標を掲げて、そこに向かってルールを全く決めないということをやっています。ルールは決めませんが、ルールを作ってはいけないわけではなくて、じつはルールは国が責任を持って、作る時は作りなさいというようなことを言っています。結局国際的に決めたところで、最終的には国がかじ取りをしなければいけないというのが今の仕組みなので、こういう書き方になっていますが、やり方は自由だということに大きな特徴があります。ただレビューはやろうとしており、4年に一度、グローバル・サステナブル・ディベロップメント・レポートという形で、評価報告書を国連が出しています。

もうひとつは、このSDGsというのは総合的な目標だということです。SDGsには環境、社会、経済の3つの側面があると言いましたが、要は、経済を考えたときにも、社会、環境のことを考えなければいけないし、その逆もまた真なりということが言われています。何か目標を考えるときも、別の目標の観点というのも落としちゃいけないよと。たとえば、ある電力会社は原発を通じてSDGに貢献しています、雇用も増やしているし、エネルギーも供給しています、なんていうことを言ったりしています。これは果たして正しいのでしょうか、というような練習問題を、私の持つコンソーシアムで、出したこともあります。原発は、捨てられないものを生み出してしまうという廃棄物の問題もありますから、そうすると12番の目標には、いまの状態だと足かせになってしまいます。それから、いろいろなリスクがあります。そのリスクに対処していればいいのですが、リスクで対処し切れないことがあるというのは、東日本大震災でも明らかなことでした。目標には貢献するけれども、少なくとも他の目標に足を引っ張らないという点は、非常に重要なのではないかなと思っています。

目標に向けて動き始めた自治体・企業

次にSDGsを巡る動向です。大きな傾向としては、2年前に国連総会でSDGsのサミットが開かれ、「これまではSDGsという考えを普及するフェーズでしたが、これからは行動の10

年に入ります」ということが宣言されました。2019年からモードが変わっているわけです。日本国内でも、新たな実施指針を改定したり、モードが変わりました。

それから、2つ目が指標です。グローバルレベルでは、数値でそれぞれの目標の進捗状況を、グローバルスケールで見ていると言われています。指標の数、指標は統計委員会が毎年ミーティングをして、どんどん変わっていているので、当初からは指標の数も変わっていますが、そういったもので測るということです。去年はコロナの影響が非常に強く、去年の6月の事務総長の報告書では、コロナの影響がいろいろな形で盛り込まれています。4,000~6,000万の人が、一度貧困から脱したとしても、また貧困の状態に戻ってしまったりとか、教育の問題でも90%の世界児童生徒の人口がコロナの影響を受けて、しかもデジタルデバイスによってギャップが拡大しているとか、いろんなことが書かれており、SDGsの目標達成を考えると、かなり痛手になったと言われています。他方で、いろいろ壊れてしまったので、これチャンスにできるぞという見方もあります。ビルド・バック・ベターということが言われますが、新たに作っていくときに、より良い世界をつくっていきましょう。そんなようなメッセージも書かれています。

そうした中での日本の位置付けです。国連は国を比べることはしてないのですが、私もSDSN Japanというグローバルの研究者のネットワークがあり、ここでは独自の指標で各国の進捗を見えています。これなんかを見ると、日本は昨年時点17位。今後、このままいっても目標は達成できないというような数値になっています。

それからSDGsのローカル化も進んでいます。来年4年度目に入りますが、大体、毎年30都市ぐらいがSDGs未来都市に選ばれています。立教大学のある豊島区が東京の区では初めて、昨年未来都市に入りました。私が会長を務めさせていただいていることもあり、豊島区の環境審議会がSDGsを盛り込んだマトリックスを作って、今走らせているところです。アート・カルチャー都市というのが、豊島区の大きなビジョンで、重要なところを占めています。池袋周辺の再開発も進んでいます。そういったところをよりサステナブルにしていこうと言っているところです。

またメガネで有名な鯖江市では、女性にフォーカスを当てて、未来都市の計画を出したりしています。またユニークなところでは、川崎がバスケットのチームと連携して、SDGs達成をしており、各都市、特徴を出しながら進めています。

それから、企業の活動が本格的になっているところも、一つ特筆すべきではないかと思います。例えば、トヨタは2050年に「トヨタ環境チャレンジ2050」を掲げて、例えば、ライフサイクルでCO₂ゼロですとか、工場のCO₂排出ゼロにしますとか、非常に意欲的な目標を掲げています。そもそも、SDGsの目標は、あるべき姿を書いているので、達成できるかどうかは分からないため、企業の人たちは二の足を踏んでいるところでもあるのですが、トヨタはまず掲げてしまおうと。そこからスタートしようというので、目標という言い方をしないで、チャレンジという言い方をしています。

それからマニフレックスというマットレスの会社は、サプライチェーン全体をSDGsで考

えるということをやっています。素材もプラスチックを使っていないそうです。配送では、このマットレスをくるくるっと巻いて、8分の1の大きさにして運ぶ。これによりCO₂の排出が少なくなるわけです。長く使えて、最終的に捨てたとしても、プラスチックゼロ、有毒ガスゼロなので大丈夫ですよと、そんなようなことをやっています。

IT、科学技術イノベーションを活用したベンチャー企業や中小企業も出てきています。お客さんと産地を直接結ぶ「食べチョク」というサイトなんかは、消費者と産地を直接結ぶことによって、その間にかかるいろんな排出量を削減しています。形の変な野菜も売れるので、捨てるよりも儲けが上がるということで、生産者にも消費者にもいい仕組みをつくっておき、かなり売れ行きが好調だという話を聞いています。

慶應義塾大学 SFC で実践しているプロジェクト

最後に我々の研究室周りでどんなことをやってきているかというご紹介をしたいと思います。学生と一緒にやってきたのは、最初はSDGsが誰も知らないという状態だったので、認知度を上げようと、SDGsのステッカーを関連する場所に貼る「キャンパスSDGs」から始めました。これによってSDGを知る人が18%から83%に増えました。

それから兵庫県豊岡市の中のいわゆる消滅地区にフィールドワークの焦点を当てて、1,000人ぐらいの町で、そこでワークショップを行い、これからどういうまちづくりをしていけばいいのかという話を、ほぼ町の家全部集まるぐらいの規模でやりました。その結果、中学生が将来、町から出て行って、また戻ってきたくなくなるようなことをするといいいんじゃないかとなり、中学生と一緒にになって、いいところ探しのプロジェクトなんかをしていきました。

それから中高生対象に、SDGsの169ターゲットのアイコンをもとに、日本語でコピーを作るプロジェクトを、朝日新聞と一緒に進めてきました。

また私のいる湘南藤沢キャンパスが、SDGsをテーマに学部のイベントやったのですが、そのサイドで東京ミッドタウンがSDGsに貢献するようなデザインコンテストをやりました。このようにデザインの領域にも進んでいっています。

SDGs は回答が書かれた新しい種類の問題集

SDGsというのは、最初に「未来の常識」と申し上げましたが、教育面で考えると、回答や答えが書かれていない問題集だということだと思います。答えに至るプロセスを考えましょうという問題集です。そういった中で、この答えを出すにはどうすればいいかということ考えるには、今どこで何がうごめいてるのかという胎動を読み解く力が非常に大事なのではないかと思います。

そういうことは、歴史からの教訓であったり、文学であったり、そういったものから出てくるのが非常に多いと思います。そういったことをぜひ文学の観点から出していき、新しい文学部の可能性というのを切り開いていっていただくと、ありがたいなと思っているところです。